

## 〈はじめに〉

手塚治虫のマンガに『どろろ』という作品があります。このマンガの主人公、百鬼丸は、ある事情によりその体の四十八ヶ所を魔物に売り渡されてしまっています。一見普通に見えるその体は、実は仮のもの。そして百鬼丸は、本当の自分の体を取り戻すために、体一ヶ所につき魔物を一匹ずつ退治して行きます。ある魔物を倒し終えた時に戻って来たのもの、それは百鬼丸の、本当の“声”でした。◆構音障害で、複数の音が未獲得という状況の子どもたちがいます。その子どもたちに構音訓練を行い、一つずつ新しい音が獲得されて行く過程に立ち会っていると、いつもこの『どろろ』の物語を思い出します。最後に正常構音となって、子どもがおしゃべりしているのを聞くと、「ああ、この子は、本当はこういう“声”だったんだ」という感慨に捉われます。そして、それは「こういう人だったんだ」という感慨と重なるものでもあります。顔立ちや気立ても、もちろんその人を特徴づけるものですが、声というものがそれ以上に、その人らしさを形作るように思われるのは、そこにさまざまな心が載せられるものだからかも知れません。◆今回の学習会は「プロソディー」をテーマとしました。プロソディーとは、イントネーションやリズムやピッチ(声の高さ)など、文字には表せないことばの構成要素をさすものです。私たちは、このプロソディーの働きによって、情報を効果的に伝達し、また感情や意図を表現しています。しかし、初めに触れた発音(構音)は、いちおう文字に表せるものですから、プロソディーには含まれません。しかし、発音とプロソディーには、分かち難い関係があります。なぜなら、日本語の「ア」の音にも、「コ」の音にも、「ピ」の音にも、その音固有の響きや高さがあり、それらがプロソディーを形作る粒子となっているからです。また先ほど、いちおう文字に表せる、と書きましたが、たとえば[あ]といふかな文字で表される音には、実はさまざまな異なる音が含まれています。前に来る音や後に来る音と無理なくつながって行くために、わたしたちは無意識に、その中で最適な「ア」を選び取って発音しています。もしそのような、幾層にも異なる「ア」を持っていなかったら…きっとひと昔前のホテルのモーニングコールのような、ぎこちないロボットのような話し方になってしまうはずですが。話しことばとして完成された発音は、プロソディーに不可欠なものだと言えます。そして発音の障害とその習得については、古くから、言語治療の中で、もっとも重要な領域の一つとされ、研究や指導に多くの時間が割かれてきました。◆一方で、発達障害の子どもの多くは、発音だけではなく、プロソディーにおいても、さまざまな障害を持っています。しかし、これまでプロソディーについては、人為的な改善の難しいものとされ、発音ほどには、その研究も指導方法の開発もなされてきませんでした。とくに自閉症の人のことばの抑揚の無さやリズムの異常、区切れた発話などは、コミュニケーションにおける大きな支障であるにも関わらず、それに対するアプローチは、まだごく限られたものとなっています。◆近年、社会における情報技術科学の発達にともない、音声情報処理という領域が急速に進展して来ています。音声認識や音声合成などの技術が多くの社会的資源をもたらしていますが、ことばの障害に対する応用も試みられてきています。今回は、それらの技術の今・近未来の話題も含めて、人間のことばとコミュニケーションの基盤であるプロソディーについて考えて行きたいと思います。